

[Hokkaido Summer Institute 2019 - Diverse Issues in Health Sciences: Vital Role of Radiology]を開催

医用生体理工学分野 助教 山品 博子

7月1～5日、医用生体理工学分野ではHokkaido Summer Institute 2019を実施しました。開講期間ののべ聴講者数(履修を行わずに受講した学生数も含む)は50名でした。海外大学在籍学生の履修者数は3名と少なかったのですが、部局間学術交流協定を結ぶ高雄医学大学(台湾)より大学院生2名、チュラロンコン大学(タイ)から学部生1名が来学し、本学院生・学部生とともに講義を受講し、さらに、HSI2019以外にも北大病院見学や研究滞在を行い、協定校との関係を深めることができました。

近年では、日本だけでなく他のアジア諸国においても「がん」の罹患・死亡が問題となっていることから、今回のテーマは「Diverse Issues in Health Sciences: Vital Role of Radiology(保健科学の諸問題)」とし、診断から治療にわたる放射線の利用について学ぶ機会を設けました。講義Iは、健康科学分野の小笠原克彦教授が放射線医学におけるArtificial Intelligenceの利活用とその倫理的側面について講義いただきました。講義IIには、チュラロンコン大学(タイ)より Thititip TIPPAYAMONTRI 講師をお呼びし、Radiobiology in the era of personalized

precision radiology と題して、放射線治療における“個別化”の講義をしていただきました(写真1)。講義IIIでは、医用生体理工学分野の伊達広行教授が、細胞の放射線感受性と耐性および回復についての講義をされ(写真2)、講義IVでは、医学研究院のJin-Min NAM 講師にご依頼し、放射線生物領域の基礎から研究手法に至る幅広いトピックスを紹介していただき、さらにラボ見学をさせていただきました。講義Vでは、今回のHSI2019科目責任者である私、山品博子が、アジアにおける乳がんの罹患と検診体制および各種放射線画像検査の有用性について論文紹介を交えて講義を行いました。また、今回のHSIは本研究科で2年に一度実施している国際シンポジウムと開催時期が重なったため、受講生はポスター発表も、国内外で行われている関連分野の研究やその知識を共有する場となりました。

Hokkaido Summer Institute は、本研究科・学部にとって数少ない英語による講義の機会となり、特に、学部生の講義時間を利用して一部授業を開講したことで、より多くの学生にとっての国際交流および共同研究の動機づけとなったと思います。また、英語で必死に質問するなど活発な交流も見られ、本学に着任してから2年になりますがとても新鮮な光景でした。国際交流には大変な側面がたくさんありますが、海外へ興味があるけどよくわからない、自分にどんな道があるのか見えない、そんな学生さんにとっての学びの場であり、心のハードルを少し下げて異国の文化と教育・研究について触れる場になったのではないかと考えています。

最後に、略式ではありますが、本講義の実施にあたり多大なご協力を頂きました事務の皆様、放射線学専攻教員と海外大学の学生サポートをしてくれた大学院生の皆さんにお礼申し上げます。



写真1：チュラロンコン大学(タイ)のThititip 講師による講義



写真2：伊達広行教授による講義